

塩田千春

Chiharu Shiota

中野仁詞

Hitoshi Nakano



第56回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展

日本館キュレーター指名コンペティション 企画提案書

企画者：中野仁詞（公益財団法人神奈川芸術文化財団）

塩田千春の新作インスタレーション

《掌の鍵》-The Key in the Hand-

【基本構想および出品作家の選定理由】

空間に糸を張り巡らせる大規模なインスタレーションや、ドレス、ベッド、靴や旅行鞆など、人の痕跡を感じさせる／記憶や時間を内包する物を用いた作品などで知られる塩田千春。鑑賞者の感覚に直接訴えかける塩田の作品は、日本や作家の現居住地であるドイツのみならず、欧州各国、アメリカ、イスラエルやオーストラリア、アジア諸国などで発表され、高く評価されている。2012年の第1回キエフ国際現代美術ビエンナーレでは、観客の投票によって選ばれる「オーディエンスチョイス賞」を受賞するにいたった。

歴史ある国際美術展としての地位を維持し続けているヴェネチア・ビエンナーレ。政治や歴史的背景を踏まえた社会的な作品や大規模なインスタレーションは、最近では定番となり、現代美術の国際展における表現の多様化や高額な費用をかけた巨大装置的な作品による競争は、もはや驚くに値しない。

塩田千春もまた、大規模なインスタレーションを得意とする。しかしそれらは、観るたびに新鮮さと力強さを失うことなく、「心」に直接浸透するような静けさや美しさを合わせもっていることが特筆に値する。ゆえに塩田の作品は、言葉や歴史的な背景を超えて世界各国の観客に感銘を与えるのだ。塩田千春の作品は、私的な体験を、美術という普遍的な言語に置き換えて制作されている。彼女が体験した苦難や恐怖、悲しみといったネガティブな感情を昇華、浄化し、全力で変換し放出するように、近年およびただし数々の作品を制作、発表している。

「死」と「生」という人間の根源的な問題。それを直視し美術の可能性を探求してきた作家塩田千春。彼女ならではの「心に直接訴える」美術表現を、このヴェネチア・ビエンナーレという国際的な舞台で日本館から発信したい。

「死」あるいは未知の世界を想起させる塩田の作品には常に「闇」がある。大規模な国際展において、東日本大震災で物理的にも精神的にも「傷」を負った日本の姿と重ねてその「闇」の部分が過剰に重なることも十分に予想される。しかし、彼女の作品には常に、力強い「光」（希望の光、精神の光といっても良いかもしれない）が感じられる。それは、日本のみならず、世界の不安的な情勢、個々の人々の不安な精神状態の中において、「光」を導く扉を開ける「鍵」となるのではないか。

今回日本館に提案する展示プラン《掌の鍵》は、地下階（1F）に新たに壁を箱形に設け、階下の構造と作品、および階上のインスタレーションが絡み合う総合的なインスタレーションである。階下の壁面には外部に向けて映像と写真、そして階上の展示室内では2艘の舟と赤い糸および古い鍵を使ったインスタレーションを展開させる。この基本的な構想をもとに、実際の作品は現場にて協働チームとの身体的労働や微調整によって完成へと導かれる。

階下の映像作品は、生まれた時の記憶を幼児が話す映像である。そして、子供の掌に鍵を載せた巨大な写真が壁3面に展示される。2階展示室では、空間を埋め尽くすような赤い糸がまず目に入るだろう。天井から垂らされた赤い糸には約5万個におよぶ夥しい数の鍵が結ばれる。そして、赤い糸と鍵の中を

漂うかのように木製の古びた舟 2 艘が置かれる。人間が持つ初めての記憶と、積み重なった過去の記憶。階上のインスタレーションと階下の作品は穏やかに交差する。

今回の構想は、彼女が昨年大切な人を亡くした体験が基点となっているのだが、塩田の作品は、私的な感情を表現しようとするものではなく、あくまでも作家自身の経験や実感をもとに、美術という言葉に置き換えるものである。

塩田千春は、インスタレーションを「瞬間の哲学」と呼ぶ。これは、「瞬間的に鑑賞者の心に何かを訴え、生きていることはどういうことなのかを伝える」ことを意味する。古びた舟、赤い糸を夥しい数の鍵とつなぎ合わせる今回のプランも、高価な装置や目新しい技術を使わない彼女ならではの手法によって、言語を超えた視覚的、感覚的コミュニケーションを可能にする美術本来の力を見せる機会となるだろう。悲しみや死の恐怖から目をそらすことなく、「生」の実感を捉えようとする真摯な姿勢から導かれた塩田の作品は、国境や人種、文化的歴史的背景を超えて、世界の人々とのコミュニケーションを可能にする。「瞬間の哲学」は、多くの人々の心を打つことになるだろう。

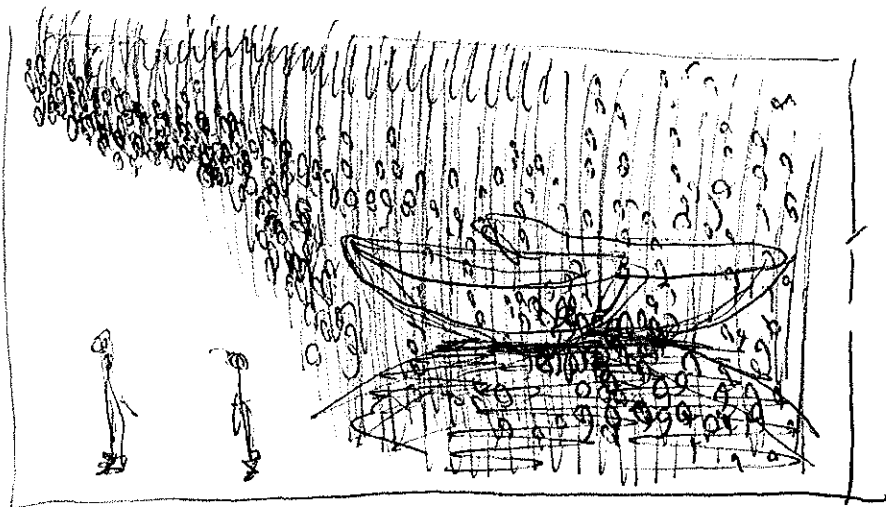
【出品作家】

塩田 千春（しおた・ちはる）

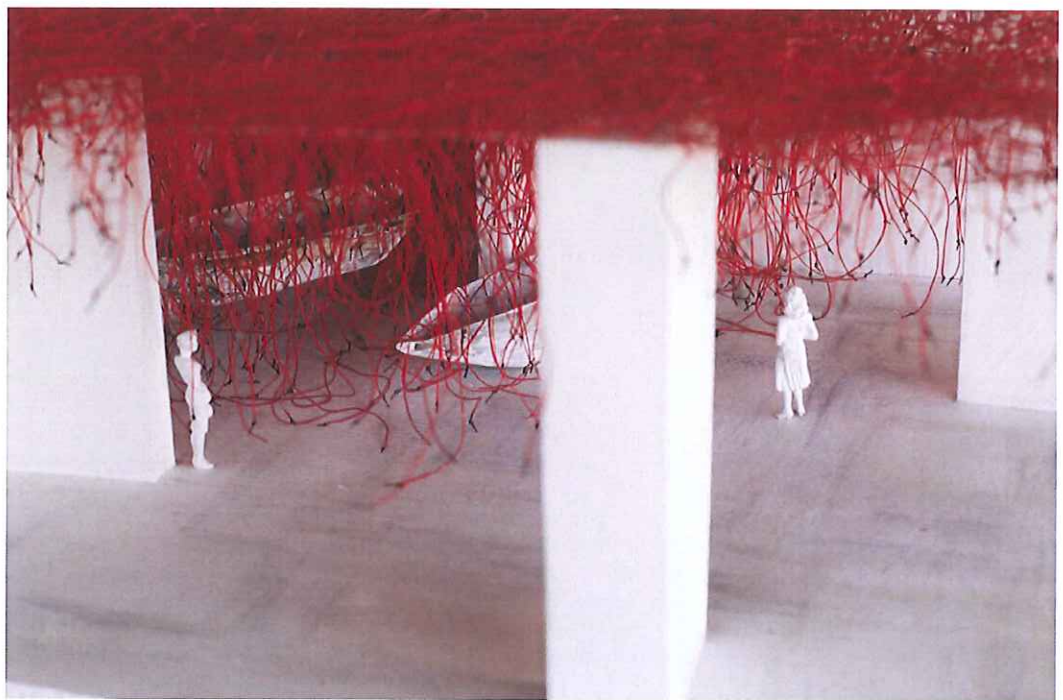
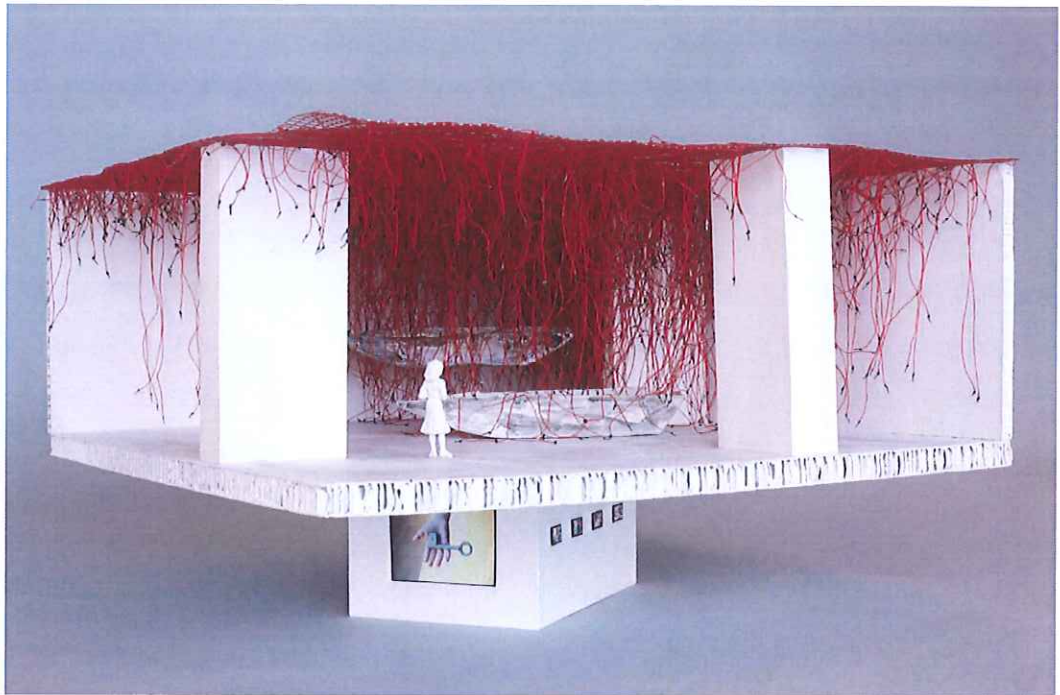
1972年 大阪生まれ 現在、ベルリン在住

生と死という根源的な問題を直視し、「生きることは何か」「存在とは何か」を探求する。

大規模なインスタレーションを中心に、立体、写真、映像作品など多岐に渡る表現手段を用いて制作する。



展示プラン《掌の鍵》



メインの展示室内に木製の古い舟、赤い糸と鍵を使ったインスタレーション、地下階（1F）のピロティには外部に向けて写真と映像を展示する。

◎ 地下階（1階）ピロティ

ピロティに4面の白い壁を建て、3面に子どもの掌に載せた鍵の写真を大きく引き延ばして展示。もう1面の壁には、4台の小さなモニターに映像作品《どうやってこの世にやってきたの?》を展示。

この作品に登場する子供たち（映像）が上階の展示室で展示される《掌の鍵》を支えているイメージで全体を構成。観賞者を日本館に誘導する要素としてピロティでこの作品を展示する。



《どうやってこの世にやってきたの?》

生まれたときの記憶を言葉で覚え始めたばかりの2歳から3歳の子供たちに尋ねる。



「誰かが頭をギュッギュッと引っ張った。」

「卵の中に僕はいて、そのときはみんなの事を知っていたけれど、産まれて来て誰も知らなくなった」

「羽を広げてここに飛んできたの。お母さんは下で羽を作っていたわ。」

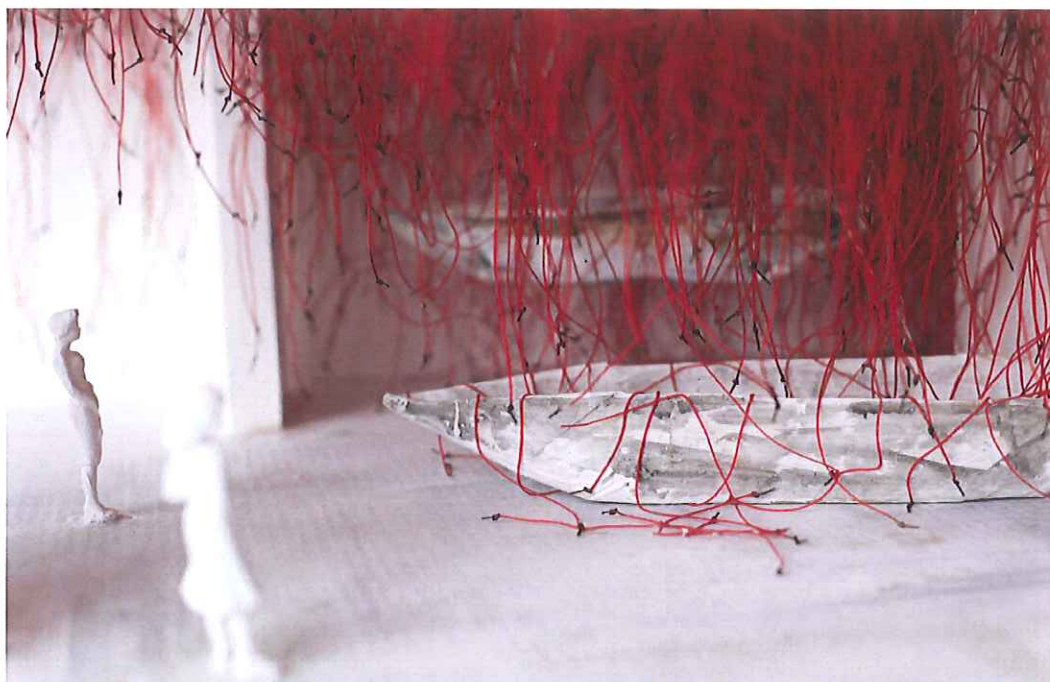
1人1分ほどの映像。4台のモニターを使い、約30人の子供が登場予定。

まるでおとぎ話のように話し出す子どもたちの言葉。作り話やそら言と決めつけてしまうにはあまりにリアルで、聞き流がすことが次第にできなくなってくる。

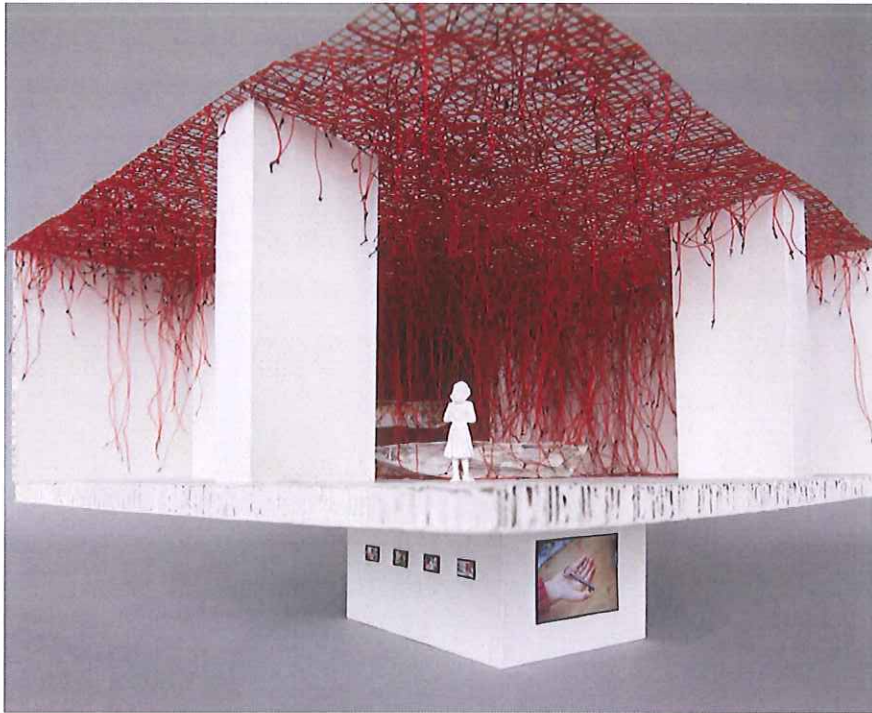
◎ メイン展示室

ピロティから導かれた、展示室内には赤い糸で繋がれた多くの鍵と2艘の舟によるインスタレーションを展示する。

空間を埋め尽くすように赤い糸が天井から吊り下げられ、その糸の先には鍵が結ばれる。「鍵は掌に乗るほど小さい。しかし、その鍵は、幾多の記憶の蓄積という重みをもちつつ、天井から降り注いでいる」。舟のかたちは、何かを掴もうとする時の手の形に似ている。



新作に何故「鍵」を使うのか。このキュレーターからの問いに、塩田は、「昨年子供を死産しその後、父親が亡くなりました。その経験がなければ赤い糸で天井からたくさんの鍵を吊るしたいという気持ちは生まれませんでした」と答えた。塩田は、今、作家というより一人の人間として抱えきれないほどの悲しみを抱いている。塩田が、自身が前へ進むための鍵を掴もうとする衝動は、美術という言葉によって、我々の心に浸透するシーン（風景／場面）へと展開する。



第56回 ヴェネチアビエンナーレ日本館 予算案 塩田千春

単位：万円

費目	内容	単価	計
現地管理運営費	光熱費、警備費等	1000	1000
作品制作費	材料費（鍵+糸、消耗品）	580	1120
	映像機器、照明	300	
	協力謝金	240	
展示施工費	壁、バナー等制作	300	400
	船設置	100	
輸送費	船輸送（保険込み）	290	350
	欧州内資材等輸送	60	
関係者旅費	欧州内移動（作家・アシスタント）	20	300
	日本・欧州	160	
	滞在宿泊費	120	
広報費	無料パンフレット作成（翻訳、デザイン、印刷）	160	300
	郵送費	60	
	その他	80	
カタログ作成費	カタログ作成（翻訳、デザイン、印刷）	430	430
作品制作予備費	作品制作等 予備費	100	100
予算額総計			4000

塩田千春

1972年、大阪生まれ。1996年、京都精華大学洋画科卒業。日本では、村岡三郎に師事。1996年、渡独。
1997年、ブラウンシュバイク美術大学に在籍、マリナー・アブラモヴィッチに師事。後にベルリン芸術大学にて学ぶ。
2008年、神奈川県民ホールギャラリーの個展「沈黙から」で平成19年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。
2012年、文化庁よりオーストラリア文化交流使に任命されオーストラリアを訪問。
2012年、第1回キエフ国際現代美術ビエンナーレにてオーディエンスチョイス賞受賞。
現在、ベルリンを拠点に活動。

主な個展

- 2013年 「アザー・サイド」(タウンナーギャラリー、イギリス)
「ありがとうの手紙」(高知県立美術館、高知)
- 2012年 「私たちの行方」(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、香川)
「ステアウェイ」(クンストハレ・キール、ドイツ)
「交差する糸とリゾーム」(カーサ・アジア、バルセロナ)
- 2011年 「本の記憶」(ゲヴァスティ・ファンデーション、ヴェニス)
「静けさの中で」デタッチド(タスマニア、オーストラリア)
- 2009年 「流れる水」(発電所美術館、富山)
- 2008年 「精神の呼吸」(国立国際美術館、大阪)
- 2007年 「沈黙から」(神奈川県民ホールギャラリー、横浜)
- 2005年 「空間」(ハウス・アム・リュッツォーブラッツ、ベルリン)
- 2003年 「オール・ア ローン」(ウヤズドフスキ城現代美術センター、ワルシャワ)

主なグループ展

- 2013年 「Everyone Carries a Room Inside」(SEAM 美術館、エルサレム)
- 2012年 「Traces of Time. Francis Bacon and Existential Conditioning in Contemporary Art」
(ストロツィ財団 現代文化センター、フィレンツェ)
- 2011年 「Lost in Lace」(バーミンガム美術館、バーミンガム)
- 2011年 「メル現代美術国際ビエンナーレ」(メル、フランス)
- 2010年 「メディエーションズ ビエンナーレ」(ボスナム、ポーランド)
「あいちトリエンナーレ2010 -都市の祝祭-」(名古屋)
「瀬戸内国際芸術祭2010 -アートと海を巡る百日間の冒険-」(豊島、香川)
「水浴考」(東京国立近代美術館、東京)
- 2009年 「第3回モスクワビエンナーレ」(ロシア)
- 2008年 「Eurasia. Geographic cross-overs in art」(トレント・ロヴェレート近現代美術館、イタリア)
- 2006年 「東京ーベルリン／ベルリンー東京」(ノイエ・ナショナル・ギャラリー、ドイツ)
「第6回光州ビエンナーレ2006 熱風変奏曲」(韓国)
- 2004年 「第1回セビリア現代美術ビエンナーレ」(スペイン)
- 2001年 「横浜トリエンナーレ2001」(横浜)
「Continental Shift」(ルートヴィヒ・フォーラム、ドイツ、他3都市を巡回)
- 2000年 「夢の跡：現代日本の美術」(ハウス・アム・バルドゼー他、ドイツ)

主なプロジェクト

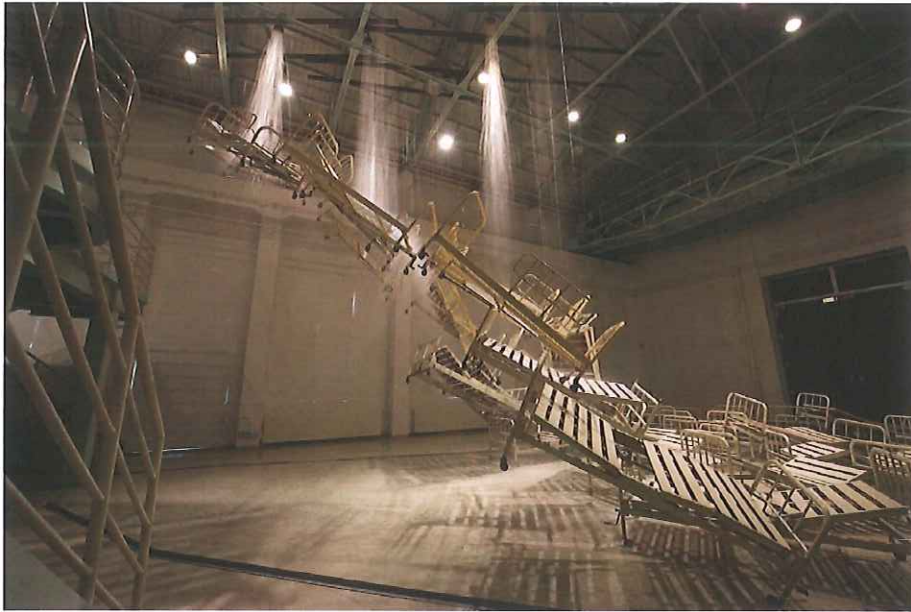
2011-2013年「松風」ピア・マイヤー・シュナイダーと共同舞台演出。
監督：サシヤ・ヴァルツ、音楽：細川俊夫(モネ国立劇場／ブリュッセル、国立歌劇場／ベルリン、他2カ国を巡回)

参考作品



上: 〈From in Silence〉
神奈川県民ホールギャラリー、神奈川
2007年

下: 〈From in Light〉
神奈川県民ホールギャラリー、神奈川
2007年



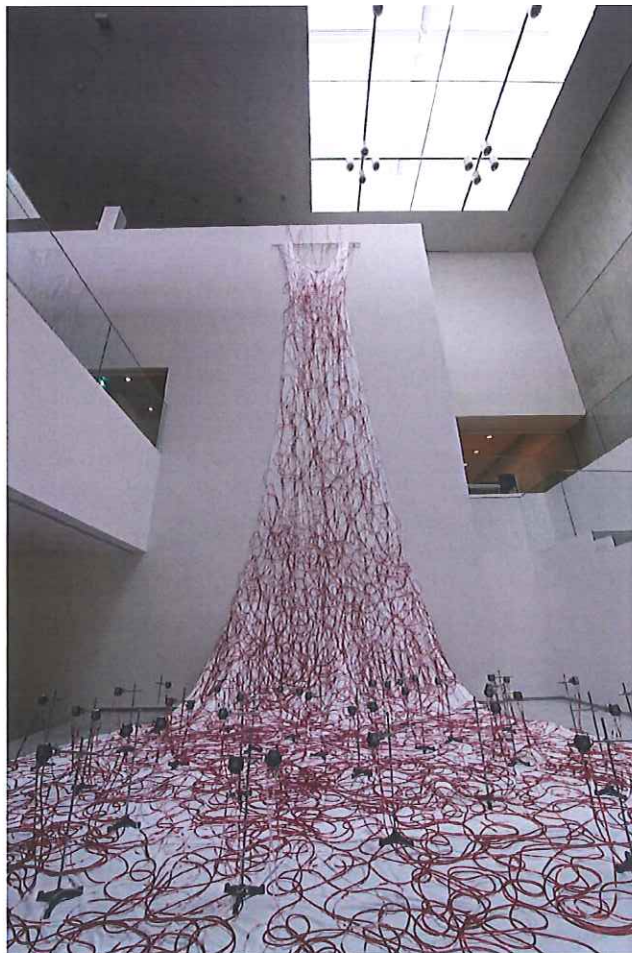
《流れる水》
発電所美術館、富山
2009年



《大陸を超えて》
国立国際美術館、大阪
2008年



《ありがとうの手紙》
高知県立美術館、高知
2013年



上:《人生のつながり》
メディアーションズ ビエンナーレ、ポーランド
2010年

下:《私たちの行方》
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、香川
2012年